聖徳太子の名号を追う

―― 廐戸のいるのいないの百変化 ――

酒　井　龍　一

「逮乎 聖德太子 設爵分官 肇制禮儀 然而專崇釋教 未遑篇章」（『懐風藻』「序」）

「天皇諡・・・古記云・・・一云 上宮太子称聖德王之類」（『令集解』「公式令」）

鰡（ぼら）の眼の鱗（うろこ）おとせし名著かな

近年、楽しく「斑鳩歩けオロジー」をしている。周知のように、聖徳太子は多様な名号をもつ（家永三郎1942年）。過日、太子研究に造詣が深い東野治之先生から『日本古代金石文の研究』（岩波書店2004年）を拝受。「法隆寺金堂釈迦三尊像の光背銘」（109－122頁）の実証に感銘を受けた。同銘は名号研究の定点でもあり、この機会に多様な名号の理解に努める。先ず、その学恩に感謝する。

『日本書紀』云々 謎が多すぎる

聖徳太子の伝記として、その成立が最も古く、しかも成立年次の明らかなのは『日本書紀』の該当箇所である（田村圓澄・川岸宏教編1985年『聖徳太子と飛鳥仏教』吉川弘文館：１頁）。

先学に従い、『日本書紀』の関係個所を抜粋する（『新訂増補 国史大系 日本書紀 後編』）。

【誕生 敏達三（574）年：１歳】

敏達五（576）年　菟道貝鮹皇女 更名菟道磯津貝皇女也 是嫁於東宮聖德

用明元（586）年　廐戸皇子 更名豊耳聡聖德 或名豊聡耳法大王 或云法主王

是皇子初居上宮後移斑鳩児

於豊御食炊屋姫天皇世位居東宮

崇峻即位前紀 用明二（587）年　竹田皇子・廐戸皇子・難波皇子

是時 廐戸皇子束髪於額

推古元（593）年　立廐戸豊聡耳皇子為皇太子　【20歳】

其名謂上宮廐戸豊聡耳太子

二（594）年　皇太子（詔皇太子及大臣 興隆三宝是時）

三（595）年　皇太子（慧慈帰化・慧聡来朝）　【22歳】

四（596）年

五（597）年

六（598）年

七（599）年

八（600）年

九（601）年　皇太子（初興宮室于斑鳩）　【28歳】

十（602）年

十一（603）年　皇太子（来目皇子）・皇太子（尊仏像）・皇太子（大楯及靫）　【30歳】

十二（604）年　皇太子（憲法十七条）　【31歳】

十三（605）年　皇太子（丈六仏像）・皇太子（褶）・皇太子（居斑鳩）　【32歳】

十四（606）年　皇太子（勝鬘経）・皇太子（法華経）・皇太子（播磨国水田）　【33歳】

十五（607）年　皇太子（率百寮）　【34歳】

十六年

十七年

十八年

十九年

二十年

二十一（613）年　皇太子・皇太子・皇太子・皇太子・皇太子・皇太子（遊行片岡）

二十二年

二十三年

二十四年

二十五年

二十六年

二十七年

二十八（620）年　皇太子（天皇記及国記）　【47歳】

二十九（621）年　春二月己丑朔癸巳 夜半 廐戸豊聡耳皇子命薨　（註２）　【48歳】

是月 葬上宮太子於磯長陵

高麗僧惠慈聞上宮皇太子薨

為皇太子請僧而設斎

曰上宮豊聡耳皇子

今太子既薨之

因以遇上宮太子於浄土

其獨非 上宮太子之「聖」慧慈亦聖也

舒明即位前紀　豊御食炊屋姫天皇廿九年 皇太子豊聡耳尊薨

名号の登場の仕方で、「３区分」できる。

A：敏達五（576）年～推古元（593）年頃 【(誕生）～皇太子】

東宮聖徳・廐戸皇子・豊耳聡聖徳・豊聡耳法大王・法主王・皇子・東宮・廐戸皇子・廐戸皇子・廐戸豊聡耳皇子・上宮廐戸豊聡耳太子

B：推古元（593）年～同二十九（621）年頃【皇太子～薨去】

皇太子・皇太子

C：推古二十九（621）年頃【薨去直後】

廐戸豊聡耳皇子命・上宮太子・上宮皇太子・皇太子・上宮豊聡耳皇子・太子・上宮太子・上宮太子・皇太子豊聡耳尊

玉石を混ぜ官撰の『日本書紀』

以上、次のことがうかがえる。

（1）多様な先行史料を参照した。

（2）先行史料中に、「東宮聖徳」・「廐戸皇子」・「豊耳聡聖徳」・「法大王」・「法主王」・「廐戸豊聡耳皇子」・「上宮廐戸豊聡耳太子」（A）、「廐戸豊聡耳皇子命」・「上宮太子」・「上宮皇太子」・「上宮豊聡耳皇子」・「太子」・「皇太子豊聡耳尊」（C）があった。

（3）分註（A）で、異系の名号を記す（「豊耳聡聖徳」・「法大王」・「法主王」）。

（4）A・Cは、多様な先行史料をそのまま引用した。

（5）AとCでは名号は異なり、依拠史料の差を示す。

（6）Bは、「皇太子」に統一し、一括・編集・脚色・執筆した。

（註1）太子関係の記事に関しては、田中嗣人「「日本書紀」の太子記事」（『聖徳太子信仰の成立』吉川弘文館1983年）参照されたし。また、立太子・皇太子に関しては、直木孝次郎「廐戸皇子の立太子について」『聖徳太子と飛鳥仏教』（吉川弘文館1985年）・荒木敏男『日本古代の皇太子』（吉川弘文館1985年）を参照せよ。

（註2）薨去は、「推古三十（622）年：49歳」が定説。

名号を追えば微笑む石仏

以下、次の時間枠組を念頭に稿を進める。

0期：誕生 敏達三（574）年	【本名系】廐戸王
1期：～皇太子 推古元（593）年	＋【呼称系】上宮王
2期：～薨去 推古二十二（622）年	＋【敬称系】法皇
3期：～上宮一族没 皇極二（643）年	＋【哀惜系】（我）法王大王
4期：～斑鳩寺焼失 天智九（670）年	＋【和謚系】止与刀弥々（→豊聡耳）
5期：～同寺再建（690年頃）	＋【顕彰系】聖徳法王・聖王・豊聡耳
：～飛鳥浄御原令 持統三（689）年	＋【令制系】｛天皇｝：（皇）太子・東宮
：天武持統朝（672～696年）	＋【漢謚系】聖徳
	＋【連結系】上宮廐戸豊聡耳太子・他
6期：～『日本書紀』養老四（720）年	＋【国策系】皇太子
7期：～『上宮聖徳法王帝説』9世紀	＋【信仰系】上宮聖徳法王・聖徳太子・他

先学の声に八耳豊聡耳

1）景戒：「聖徳皇太子示異表縁第四」

景戒師は、弘仁十三（822）年頃、『日本霊異記』の「聖徳皇太子示異表縁第四」で、三種の由来を記している（『新日本古典文学大系30 日本霊異記』：205頁）。「廐戸豊聡耳」が筆頭にきているのが注目される。同書には、「皇太子」が定番で、「上宮皇」・「廐戸皇子」・「聖徳皇太子」・「聖徳王」なども登場する。

「・・・立之為皇太子 々々有三名 一号曰廐戸豊聡耳 二号曰聖徳 三号曰上宮也」

2）法空：「御名不同事」

法空師は、正和三（1314）年の「御名不同事」『聖徳太子平氏伝雑勘文』で、次の名号に言及、出所を示している（『大日本佛教全書 112』：138－139頁）。

「聖徳太子」・「等已乃彌己等」・「廐戸皇子」・「豊聡耳聖徳太子」・「豊聡耳法大王」・「法主王」・「上宮」・「上宮太子」・「上宮廐戸豊聡耳太子」・「勝鬘」・「佛子勝鬘」・「臣廐戸云々」

3）家永三郎：「聖徳太子御名号考」

家永氏は、「聖徳太子御名号考」『上代佛教思想史』（1942年 畝傍書房）で、各種名号を集成。名号11種と、身分上の呼称９種を分類。解説を加えている。

（1）廐戸――廐戸皇子、馬屋門皇子、馬屋戸皇子、有麻移刀、
（2）豊聡耳――等已刀彌々乃彌己等、有麻移刀彌々乃彌己等、等興刀彌大王、
（3）八耳――廐戸豊聡八耳命、廐戸豊聡八耳皇子、
（4）上宮――上宮法皇、上宮廐戸豊聡耳太子、上宮王、
（5）聖王――東宮聖王、聖王、
（6）法王（法皇）――上宮法皇、法皇、聖徳法王、聖徳皇、法王、
（7）法大王（法王大王）――法大王、法王大王、大法皇、
（8）法主王――法主王、法王大王、
（9）聖徳――聖徳王、聖徳法王、上宮聖徳法王、東宮聖徳、上宮太子聖徳皇、聖徳太子、
(10) 佛子勝鬘――
(11) 斑鳩太子――
（イ）ミコ――王、
（ロ）ミコト――命、彌巳等、王命、
（ハ）オホキミ――於保支美、大王、
（ニ）ヒツギノミコ――太子、東宮、
（ホ）皇太子（東宮）――

（ヘ）摂政――

（ト）皇帝――上宮皇帝、

（チ）菩薩――上宮皇太子菩薩、

（リ）君――聖徳君、

4）坂本太郎：「世系及び名号」

坂本氏は、『聖徳太子』（吉川弘文館1979年）で、褒貶の意のない国語風の「廐戸」、宮に関係する「上宮」、聡明さを讃えた国語風の「豊聡耳」、漢語で高徳・善行を賛美した「聖王や法王」など、四種に分類した。更に、太子自身が「三経義疏」や「十七条の憲法」などで度々「聖」の文字を使ったことに注目。生前からの太子の特異性を指摘すると共に、「法王」→「法大王」→「法主王」への変化も指摘した。

5）田村圓澄：「法王考」

田村氏は、「法王考」『古代学叢論』（平安博物館1983年）などで、「法王」の仏典用例を検討。天智九（670）年を境に、私的「恋慕渇仰＝廐戸王＝半跏像」段階から、国家的「日本の釈迦＝法王大王・法王＝聖徳太子信仰」段階へと展開したとみる。「法王」用例に、「釈迦」・「特定の如来」・「如来＝覚者一般」・「正法をもって統治する国王」の４種があり、「法皇」例はないと云う。

6）東野治之：「ほんとうの聖徳太子」

東野氏は、「聖徳太子関係銘文史料」（『聖徳太子事典』1997年 柏書房）、「ほんとうの聖徳太子」『ものがたり 日本列島に生きた人たち 3 文書と記録 上』（2000年 岩波書店）、「法隆寺金堂釈迦三尊像の光背銘」・「天寿国繡帳の図様と銘文」・「法起寺塔露盤銘」（『日本古代金石文の研究』前出）などで示唆に富む多くの研究を披露。特に釈迦三尊像光背銘の実証は、名号研究の「定点」となる重要な成果である。

7）佐藤信：「『上宮聖徳法王帝説』にみえる廐戸王の名」

佐藤氏は、「『上宮聖徳法王帝説』にみえる廐戸王の名」（沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉『上宮聖徳法王帝説 注釈と研究』吉川弘文館2005年）で多様な名号を集成・検討し、①廐戸・②豊聡耳・豊聡八耳・③上宮・④聖徳・⑤法王・法主王の五系統に大別すると共に、①→②→③→④→⑤と展開することを推察している。

8）曾根正人：『聖徳太子と飛鳥仏教』

最近、曾根氏は『聖徳太子と飛鳥仏教』（吉川弘文館2007年）で、「聖徳太子非実在説」の問題点を指摘すると共に、三国時代の翻訳経典『六度集経』に注目すべしと提言している。注目されるのは、「聖徳」の用語が出所した可能性があるという。自身の言葉を借りれば、「「聖徳」称号の創始者が誰かは別にしても、典拠が本経である可能性は高い」という。確かに「聖徳」が頻出している（：25頁）。

「・・・久しく聖徳をおもい、いまここに来たりとまる。・・・(巻一)

・・・もし先に畜心を戴き、退きて聖徳を懐かば、正法いかん。・・・(巻四)

・・・民を教え、仏を奉りて、上聖徳を修す。・・・(巻六)

・・・王、この所を尋ねて、はるかに無上聖徳の霊をみる。・・・(巻七)」

古(いにしえ)の文(ふみ)へ眉間の皺(しわ)を寄せ

1期：誕生～皇太子

「聖徳の太子」めざして御誕生

誕生時の実名や日常の呼称は未詳である。「上宮記下巻注云」では、法大王の兒はすべて「～王」が付く。『日本書紀』本文に「廐戸皇子」や「上宮廐戸豊聡耳太子」とあり、本名を「廐戸王」、呼称を「上宮王」とみる（東野2000年：19頁)。ついては、聖徳太子自筆とされる『法華義疏』の巻頭に、「此是大委国上宮王私集非海彼本」の追記や、『上宮王院縁起資財帳』(天平宝字五、761年）の存在がある。

2期：皇太子～薨去

法隆寺金堂釈迦三尊像銘：上宮法皇

釈迦像の眼(まなこ) 真実(まこと)の火を放ち

『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』(奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1979年：27－40頁)。法興元卅一年は推古二十九(621）年。法王登遐は三十（622）年。像造立は三十一（623）年。銘文証明は東野（2004年 前出)。

(一）釈迦三尊像の銘文は、造像の過程で構想されていたことが、鋳造技法上確かめられる。

(二）釈迦三尊像は聖徳太子追福のため、銘文にある通り、癸未年（推古天皇三十一年、六二三）ごろ造立されたと認めてよい。　　【同：120頁 結語の（三)・(四）は略】

	法興元卅一年 歳次辛巳十二月・・・	1行
「上宮法皇」	明年正月廿二日 上宮法皇 枕病弗愈	2－3行
「法皇」	二月廿一日癸酉 王后即世 翌日法皇登遐	9行

同銘文によれば、近親者が、存命中、「上宮法皇」と呼んでいた。

3期：薨去～上宮一族没

天寿国繍帳銘：我大王

繡帳に「我大王」の影を縫い

『上宮聖徳法王帝説』収録（沖森・佐藤・矢嶋2005年）。東野「原繡帳≒推古末年」（3期）・「改作旧繡帳≒天武持統朝」（5期）・「補修新繡帳＝建治二（1275）年」説に依拠。

「右のような見方に立つと、現存の繡帳の前に、推古末年頃作られた原繡帳ともいうべきものがあり、それに銘文が入れられていたということになろう。太子信仰の高揚とともに、もとの発願趣旨をふまえつつ、太子の事蹟を加えた新しい繡帳が制作されるに至ったと解される」（東野2004年「天寿国繡帳の図様と銘文」前出：165頁）。

斯帰斯麻宮治天下天皇	77行	（旧）【天→大（原）】
斯帰斯麻天皇	80行	（旧）【同】
「等已刀彌々乃彌已等」 生名等已刀彌々乃彌已等	85行	（旧）【等→止（原）】
「太子」 明年二月廿二日甲戌夜半 太子崩	86－87行	（旧）【太子→大王（原）】
「我大王」使我大王与母王如期従遊	88行	（原）
「我大王」我大王所告 世間虚仮	88－89行	（原）
「我大王」謂我大王 応生於天寿国之中	89行	（原）
「大王」 悕因図像 欲観大王往生之状	90行	（原）

「繡帳」（3期）定番は「我大王」。薨去直後、四妃の一人 位奈部橘王が「我大王」と呼んでいた。「我大王」（3期）は、「我法王大王」（3期：湯岡碑文）や「3期：法大王」（「上宮記下巻註云」）と整合する。

伊予湯岡碑文：我法王大王

「法王」に「大王」たして御冥福

「伊予国風土記曰」『釈日本紀 巻14』（『神道大系 釈日本紀』：339頁）。法興六年は推古四（596）年。石碑未詳。「薨去後」説（田村1983年）有力。

「我法王大王」　法興六年十月 歳在丙辰 我法王大王与恵慈法師及葛城臣
逍遥夷与村 正観神井 歓世妙験 欲叙意 聊作碑文一首。
・・・何異 于寿国・・・　【→天寿国？】（詩略）

同碑文によれば、23歳で、「我法王大王」と呼ばれた。ただし、「法王大王」は不自然である。三尊像（2期：法皇）と原繡帳（3期：我大王）の存在から、生前は「法皇」と呼ばれ、薨去後の追悼碑に「我法王大王」と記されたとみる。「法皇」≒「法王」（東野2000年：24頁）。近親者の「我・・」用法も特徴で、原繡帳（3期）の「我大王）とも整合する。

上宮記下巻註云：法大王

『聖徳太子平氏伝雑勘文 下三』「上宮記下巻註云」（『大日本佛教全書 112』：239頁）。

	大宮太子御子孫併妃等事	『雑勘文』
「法大王」	法大王（以下、妃、子・孫の系譜略）	「上宮記」
	凡上宮記三巻 太子御作也	『雑勘文』

「法大王」は、原繡帳（3期：我大王）・湯岡碑文（3期：法王大王）と整合する。「法皇」（2期）→「大王・法王大王・法大王」（3期）の展開も違和感ない。

（1）生前（2期）、「法皇」と呼ばれた。
（2）薨去後（3期）、「我法王大王」・「我大王」・「法大王」と記された（敬称追加）。
（3）『日本書紀』分註の「豊聡耳法大王」・「法主王」も同類とみる（3期）。
（4）3期のそれらを「法王大王」系と総称する。
（5）近親者による「我・・」用法も特徴である。

4期：上宮一族没～斑鳩寺焼失

厩戸の王の豊かな耳自慢

天寿国繡帳（改作）

「トヨトミミ」（字音仮名）例に、繡帳銘・元興寺塔露盤銘・同丈六釈迦像光背銘がある。「等与刀弥々」を含む繡帳銘前半は、同時に「天皇」・「太子」を含み、「改作」（5期）とみる。後述するが、5期に「豊聡耳」（『古事記』）が登場するので、「等与刀弥々」を4期とみる。『帝説』の収録銘は「等已刀彌々」だが、「止→等」に変写した可能性がある（沖森2005年 前出：168頁）。

斯帰斯麻宮治天下天皇　77行
斯帰斯麻天皇　81行
「等已刀彌々乃彌己等」 生名等已刀彌々乃彌己等　85行
「太子」 明年二月廿二日甲戌夜半 太子崩　86－87行

（1）		等已刀彌々乃＋彌己等	（天寿国繡帳銘）
（2）	有麻移刀	＋等刀彌々乃　＋彌己等	（元興寺塔露盤銘）
（3）		等與刀彌々　＋大王	（同丈六釈迦像光背銘）
（4）	上宮之＋厩戸＋豊聡耳	＋命	（『古事記』和銅五（712）年）
（5）	上宮　＋厩戸＋豊聡耳	＋太子	（『日本書紀』養老四（720）年）

元興寺塔露盤銘：有麻移刀等刀彌々乃彌己等

『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』収録（『寧楽遺文 中巻』：388－389頁）。露盤不明。

「有麻移刀等刀禰々乃禰己等」 難波天皇之世辛亥年正月五日授塔露盤銘・・天皇之女佐久羅韋等由良宮天下名等己禰居加斯夜比禰乃禰己等世 及甥名有麻移刀等刀禰々乃禰己等時・・・

（註１）『元興寺縁起并流記資財帳』の疑義に関しては、福山敏男「飛鳥寺の成立」（『史学雑誌45－10』1934年）・水野柳太郎『日本古代の寺院と史料』（吉川弘文館1993年）・吉田一彦「元興寺伽藍縁起并流記資財帳の研究」（『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要15』2003年）参照のこと。以下、同じ。

元興寺丈六釈迦像光背銘：等与刀禰々大王

『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』に収録。（『寧楽遺文 中巻』：389頁）。銘文不明。

「等與刀禰々大王」・・・揖命瀆辺天皇子 名等與刀禰々大王・・・

（１）「止与刀弥々」が登場した（４期）。
（２）「豊聡耳」と変化する（５期）。
（３）『古事記』（４期）は「豊聡耳命」系。
（４）『日本書紀』（５期）は「豊聡耳太子」系。
（５）「大王」→「太子」、「弥己等」→「命」→「太子」の順である。

５期Ａ：斑鳩寺焼失～再建

法隆寺金堂薬師如来像銘文：太子・東宮聖王

改造の噂 薬師の眼に涙

『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』（：41－48頁）。「歳次丁卯年」（推古十五、607年）と記されるが、「７世紀末造像説」が有力（福山1935年）。

	池辺大宮治天下天皇	１行	【天皇】
	歳次丙午年	１行	
「太子」	召於大王天皇与太子而誓願賜	２行	
「東宮聖王」	小治田宮治天下大王天皇及東宮聖王	４－５行	
	歳次丁卯年仕奉	５行	

同銘文によれば、34歳で、「太子」・「東宮聖王」と呼ばれた。「天皇」・「（皇）太子」・「東宮」により、「２期（推

古十五年)」の原作でなく、「５期」の改造・改銘とみる。

（１）「推古十五（607）年」（２期）とあるが、改作・改銘である。
（２）「天皇」・「太子」・「東宮」から「５期」とみる。
（３）５期に「聖王」が登場した。

（註１）福山敏男「法隆寺の金石文に関する二三の問題」（『夢殿13』鵤故郷舎1935年）。

５期Ｂ：法隆寺焼失～再建

暁の火災でしたか焼け瓦

『古事記』：上宮之廐戸豊聡耳命

『日本古典文学大系１　古事記　祝詞』（敏達天皇：343頁）。

「上宮之廐戸豊聡耳命」　又娶庶妹間人穴太王 生御子 上宮之廐戸豊聡耳命

「上宮乃＋廐戸＋豊聡耳＋命」と、名号が４連結する。

名号を連結しては格を上げ

【単体】	（２期）	法皇			
【２連結】	（３期）	法王	＋大王		
【３連結】	（４期）	有麻移刀＋等刀禰々乃＋彌己等			
【４連結】	（５期）	上宮之	＋廐戸	＋豊聡耳＋命	『古事記』
		廐戸	＋豊聡耳	＋皇子　＋命	『日本祖記』引用
		上宮	＋廐戸	＋豊聡耳＋太子	『日本書紀』引用
		廐戸	＋豊聡耳	＋皇子　＋命	『日本書紀』引用
【単体】	（６期）	皇太子			『日本書紀』定番

『古事記』（712年）	『日本書紀』（720年）引用
上宮之廐戸豊聡耳命	廐戸豊聡耳皇子・上宮廐戸豊聡耳太子
	廐戸豊聡耳皇子命・上宮豊聡耳皇子

（１）『古事記』定番は、「上宮之＋廐戸＋豊聡耳＋命」である（名号４連結）
（２）「豊聡耳」は「トヨトミミ」（字音仮名）に後出する。
（３）『古事記』は「豊聡耳命」系、『日本書紀』は「豊聡耳皇子・太子」系。

5期C：斑鳩寺焼失～再建

法起寺塔露盤銘：聖徳皇

「聖徳」がでたか いよいよ御本命？

『聖徳太子傳私記 上巻』収録（『大日本佛教全書112』：116頁）。塔・銘とも現存せず。

「上宮太子聖徳皇」　上宮太子聖徳皇 壬午年二月二十二日 臨崩之時　2行
「聖徳」　聖徳御分敬造弥勒像一軀 構金堂　7行
　　丙午年三月　10行

同銘文によれば、慶雲三（706）年頃（5期）、「上宮太子聖徳皇」と呼ばれた。

播磨国風土記：聖徳王

『播磨国風土記』（『日本古典全書 風土記上』：114頁）。霊亀元（715）年頃編纂。

「聖徳王」　傳云 聖徳王御世弓削大連所造之石也

同風土記によれば、霊亀元（715）年以前から「聖徳王」と呼ばれていた。「聖徳王」は、法起寺塔露盤銘（5期：聖徳皇）と一致する。「皇＝王」。

「古記」云：諡 聖徳王

『令集解』引用（『令集解巻卅四』（「公式令」：849頁）。『古記』は天平十（738）年頃。

諡（おくりな）は聖徳 僕に断らず

「天皇諡・・・古記云・・・一云 上宮太子称聖徳王之類」「公式令」『令集解』

「古記云」によれば、「聖徳」は諡。以前からの定着を示す（東野2000年：20頁）。法起寺露盤銘（5期：聖徳皇）・『播磨国風土記』（5期：聖徳王）・「古記」云（5期：聖徳王）の三史料は一致する。

（1）5期に「聖徳皇・聖徳王」が登場した。
（2）「聖徳」は漢諡で、以前から定着していた。

（註１）聖徳太子と推古遺文の全面否定に関しては、大山誠一『＜聖徳太子＞の誕生』（吉川弘文館1999年）・大山誠一編『聖徳太子の真実』（平凡社2003年）を参照せよ。

6 期：『日本書紀』：皇太子

【前出】

『日本書紀』ありて賑わう古代史家

7 期：『日本書紀』～『上宮聖徳法王帝説』：多様

『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』

「法王」と呼んで尊ぶ法隆寺

『寧楽遺文 中巻』（344－365頁）。北浦定政手写本。

「東宮上宮聖徳法王」	天皇并東宮上宮聖徳法王	344頁
「聖徳法王」	是以聖徳法王受賜而	344頁
「東宮上宮聖徳法王」	并東宮上宮聖徳法王 丁卯年敬造請坐者	345頁
「上宮聖徳法王」	右奉為上宮聖徳法王 癸未年三月	345頁
「上宮聖徳法王」	右上宮聖徳法王御製者	346頁
「上宮聖徳法王」	天皇戊午年四月十五日 請上宮聖徳法王	361－362頁

（1）『法隆寺』定番は「上宮聖徳法王」である。

『法隆寺縁起并資財帳』

『寧楽遺文 中巻』（390－394頁）。大和法隆寺文書。

「上宮王」 上宮王等身観世音菩薩木像 390頁
「上宮聖徳法王」上宮聖徳法王御持物 390頁
「上宮聖徳法王」上宮聖徳法王御製・上宮聖徳法王御製・上宮聖徳法王御製・上宮聖徳法王御製 391頁
「上宮聖徳法王」上宮聖徳法王御持物・上宮聖徳法王御持物・上宮聖徳法王御持物 392頁
（1）『法隆寺』定番は「上宮聖徳法王」で、上記と同一である。

『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』

『寧楽遺文 中巻』（383－390頁）。山城醍醐寺本『諸寺縁起集』。改変誤写多し。

馬屋戸豊聡耳皇子 383頁・馬屋門豊聡耳皇子 388頁

馬屋門皇子 385頁・馬屋門皇子 385頁・

聡耳皇子・聡耳皇子 385頁・聡耳皇子・聡耳皇子・聡耳皇子・聡耳皇子・聡耳皇子・(聡) 耳皇子 386頁・聡耳皇子 387頁・聡耳皇子 388頁

＋有麻移刀等彌々乃彌己等 p.388（塔露盤銘）

＋等興刀？々大王 p.398（丈六像）

（1）『元興寺』定番は「聡耳皇子」である。

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』

『寧楽遺文 中巻』(366－382頁)。旧大和正暦寺所蔵。

廐戸皇子 p.366

上宮皇子 p.366

上宮皇子 p.36

（1）『大安寺』定番は、一応、「上宮皇子」である。

名号を各自勝手に付けておく（註 各自＝各寺）

上記のように、『法隆寺』（上宮聖徳法王）・『元興寺』（聡耳皇子）・『大安寺』（上宮皇子）と、各寺でバラバラである。

『懐風藻』

「聖徳の太子」なんだか軽すぎる

『懐風藻新註』。天平勝宝三（751）年。

「逮乎 聖徳太子 設爵分官 肇制禮儀 然而專崇釋教 未遑篇章」（「序」）

「聖徳太子」は、『懐風藻』にさりげなく登場した。

『上宮聖徳法王帝説』：聖王

名号（めいごう）百態 脳内に渦が巻き

家永三郎『上宮聖徳法王帝説の研究 増訂版』（三省堂1960年）・沖森・佐藤・矢嶋『上宮聖徳法王帝説 注釈と研

究』(前出)。

1行「上宮聖徳法王」　上宮聖徳法王帝説
3行「廐戸豊聡耳聖徳法王」　生児 廐戸豊聡耳聖徳法王
7－8行「聖王」　合 聖王兄弟七王子也
8行「聖徳法王」　聖徳法王 娶膳部加多夫古臣女子 名菩岐々美郎女
11行「聖王」　又 聖王 娶蘇我馬古叔尼大臣女子 名刀自古郎女
12行「聖王」　与父聖王相濫非也
13行「聖王」　又 聖王 娶尾治王女子 位奈部橘王
14行「聖王」　合 聖王兄十四王子也
16行「聖王」　聖王庶兄 多米王
「聖王」　娶聖王母穴太部間人王
18行「聖王」　聖王祖父也
19行「聖王」　聖王伯叔也
20行「聖王」　聖王父也
21行「聖王」　聖王姨母也
22行「聖王」　聖王伯叔也
23行「聖王」　聖王母也
25行「上宮廐戸豊聡耳命」　上宮廐戸豊聡耳命 島大臣共輔天下政
28行「上宮王」・「上宮王命」　出於廐戸之時 忽産上宮王 々命
28行「上宮王」・「上宮王命」　忽産上宮王 々命 幼少聡
29－30行「廐戸豊聡八耳命」　故 号曰廐戸豊聡八耳命
30行「太子」・「聖徳王」　池辺天皇 其太子聖徳王甚愛念之
31行「上宮王」　故 号上宮王也
「上宮王」　上宮王 師高麗慧慈法師
「王命」　王命 能悟涅槃常
34行「上宮」　造法花等経疏七巻 号曰上宮御製疏
「太子」　太子所問之
35行「太子」　太子夜夢
「太子」　太子寐後 即解
36行「太子」　太子起七寺
38行「上宮王」　少治田天皇 請上宮王 令講勝鬘経
39－40行「聖王」　天皇布施聖王物
41行「上宮」　上宮御製疏 還帰本国流伝之
42行「聖王」　午年二月廿二日夜半 聖王薨逝也
「王命」　慧慈法師聞之 奉為王命
43行「上宮聖」　発願曰 逢上宮聖 必欲所化
44行「聖王」　逢聖王
46行「太子」　太子而 誓願賜　【法隆寺薬師如来像銘文45－49行】

47行「東宮聖徳王」　少治田大宮御宇大王天皇及東宮聖徳王

50－51行「上宮法王」 上宮法王 枕病弗愈 【法隆寺釈迦三尊像銘50－58行】

54行「法王」　　翌日 法王登遐　　（註「法王」→三尊像銘「法皇」）【同上 編者解釈 59－77行】

59－60行「東宮廐戸豊聡耳命」 少治田天皇之世 東宮廐戸豊聡耳命

62行「聖王」　　聖王母

64行「聖王」　　鬼前大皇后者 即聖王母 穴太部間人王也

67行「聖王」　　王后即世者 此即聖王妻 膳大刀自也

68行「法王」・「上宮聖王」 翌日法王登遐者 即上宮聖王也

69－70行「聖王」　　応言壬午年正月廿二日聖王枕病也

70－71行「聖王」　　聖王 廿二日薨也

71行「聖王」　　膳夫人先卒也 聖王後日薨也

73行「聖王」　　聖王不許

74行「聖王」　　即 聖王誄而詠是歌

75行「聖王」　　不注聖王薨年月也

76行「上宮聖王」　　上宮聖王薨逝也

77行「上宮聖王」　　前大后・上宮聖王・膳夫人 合此三所也【77行下半－93行 天寿国繍帳銘】

85行「等已刀弥々乃弥己等」 生名等已刀弥々乃弥己等

87行「太子」　　太子崩

88行「大王」　　使我大王与母王如期従遊

88－89行「大王」　　我大王所告 世間虚仮

89行「大王」　　玩味其法 謂我大王 応生於天寿国之中

90行「大王」　　悕因図像 欲観大王往生之状

95行「太子」・「聖王」 太子崩者 即聖王也

97行「上宮」　　上宮時、巨勢三杖大夫歌　　【97～103行目 巨勢三杖大夫歌】

105行「上宮王」　　故則 上宮王 挙四王像

107行「聖王」　　聖王生十四年也

111行「聖徳王」　　丑年五月 聖徳王 与島大臣共謀建立仏法

123行「上宮聖徳法王」・「法主王」 上宮聖徳法王 又云法主王・・・

124行「東宮」　　生卅九年 小治田宮為東宮也・・・

（1）『同帝説』の定番は「聖王」である（聖王22回・聖王8回）。

『帝説』は聖徳太子 気にかけず

実に多数の名号を収録する『帝説』編者の眼中に、「聖徳太子」はなかった。

『帝説』の編者 嫌いは『日本書紀』

『上宮聖徳法王帝説』と『日本書紀』との関係をみる。

『日本書紀』～720年　『上宮聖徳法王帝説』～９世紀

Ａ期：	東宮聖徳	（登場せず）
	厩戸皇子	（登場せず）
	皇子	（登場せず）
	東宮	（登場せず）
	更名豊耳聡聖徳 或名豊聡耳法大王 或云法主王	≒（法主王１回）
Ｂ期：	皇太子（23回）	（登場せず）
Ｃ期：	廐戸豊聡耳皇子命	（登場せず）
	上宮太子	（登場せず）
	上宮皇太子	（登場せず）
	皇太子	（登場せず）
	聖人	（登場せず：聖王22回・「聖王」８回）
	上宮豊聡耳皇子	（登場せず）
	聖之徳	（登場せず）
	大聖	（登場せず）
	太子	＝（太子　８回登場）
	上宮太子	（登場せず）
	上宮太子之聖	（登場せず）
	皇太子豊聡耳尊	（登場せず）

（１）『書紀』と『帝説』は無関係である

廐戸のいるのいないの百変化

以上、一冊の著書が契機となり、門外漢ながら、聖徳太子の多様な名号の理解に努めた。早速、明日、法隆寺釈迦三尊像の御尊顔を拝する予定である。合掌。

釈迦像の眼（まなこ）　一句を詠みたがり　龍一